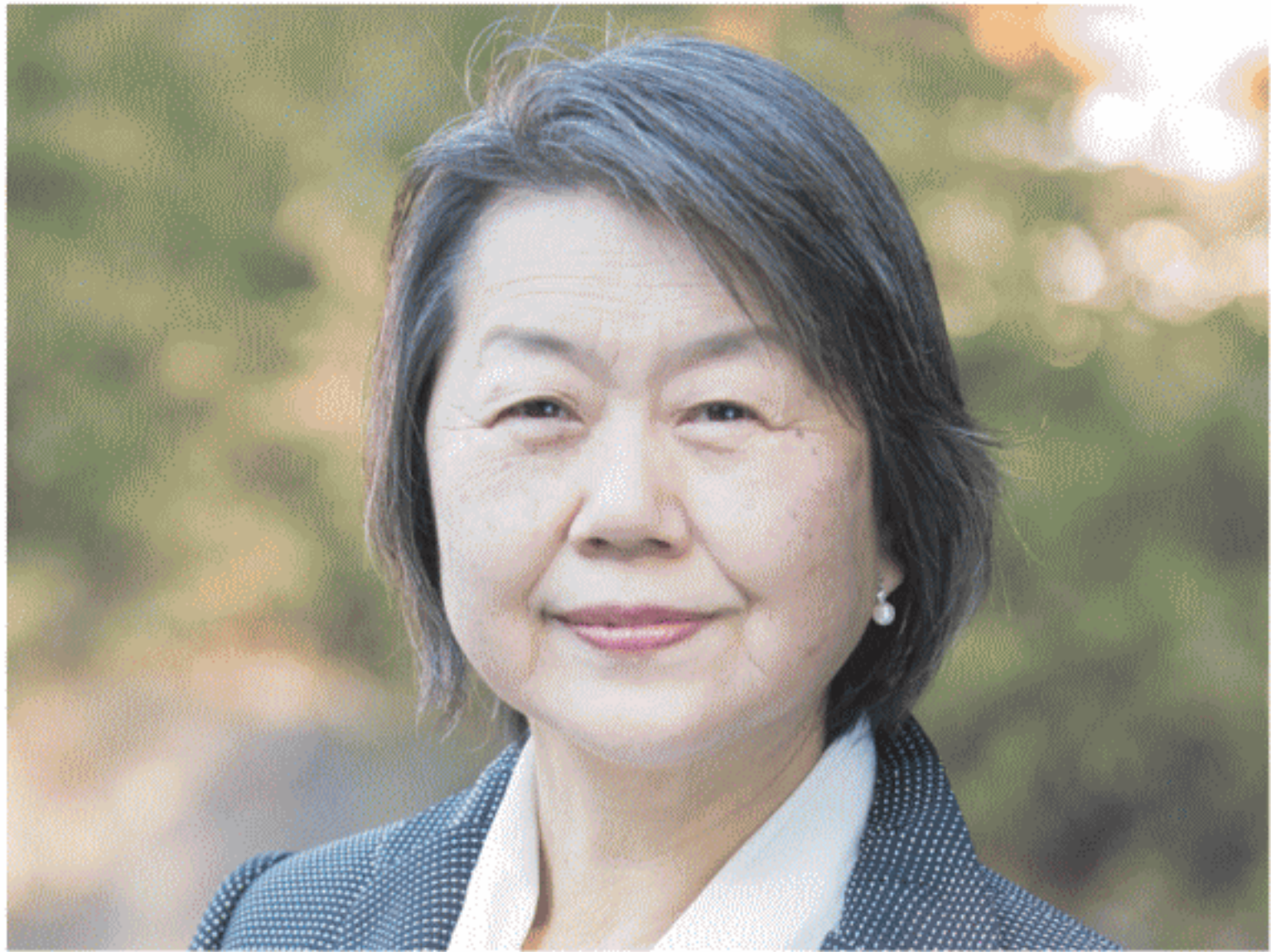


「あふれる愛」

聖句「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。
その中で最も大いなるものは、愛である。」
—コリントの信徒への手紙 I 13章13節—

部会だより

キリスト教
保育連盟
神奈川県
2013年8月20日
第124号



テーマ〈日々新しく〉

私塾まきば

園長 山田 雅 井

神さまに似せて造られた私たちは、無から有を創り出すことはできませんが、今ある有から様々なものを創り出すことはできます。美味しいもの、美しいもの、便利なもの、面白いもの……。それぞれが置かれている環境に合わせて新しいものを創り出す喜びを知っています。最近では、材料の種類も増え、工夫次第で生活環境にも変化を持たせて、普段の家庭生活を楽しむ姿が見られます。すべての基本にあるものは、神様が造られた世界です。本物の色はどこまでも深く、音は限りなく繊細な

聖 句

「新しい歌を主に向って歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。まことに主のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である」

広がり奏で、構成は非常に巧みに計算され合理的で美しく、命の営みは昔も今も変わりなく心地よいリズムで繰り返されています。「そのようにして、神はお造りになつたすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。」(創世記一章三一節)と神さまが満足なさった完全な世界は、「そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。」(詩篇一三九篇六節)が、その中におかれた私たちは、主のわざを賛美する心と、創る喜びを神さまからいただきました。

子どもたちは、環境のあらゆるものに好奇心を持ち、歓喜の声を上げ、小石一つ、小枝、葉っぱ、木の実、あらゆるものから遊びを見つけ、見立て、作り、喜びを共有します。毎日同じ日はなく、常に心と体を動かし、発見と創造を繰り返していきま。しかし、良い環境がなくては、この笑顔を期待することはできません。私たち保育者には、子どもたちの感性をくすぐる環境を整えることに配慮し、見つめる目や、小さな声を拾うことに躊躇せず、みな違うひとりひとりに適切な声をかけていく細やかで柔軟な心を持つことが要求されているのではないのでしょうか。そのためには、まず保育者自身が身近にあるものに好奇心と探究心を寄せ、創造する心を常に持ち続けることが必要かもしれません。子どもにはかないませんが、昨日と違うドキドキする今日を期待して、毎朝子どもたちを迎えています。

ある日の夕刊に大きく書かれていた言葉に目がとまりました。「流水濁らず、忙人老いず」一七歳で包丁を握り、八二歳の今日まで料理人の道を歩んでこられた道場六三郎さんの言葉ですが、材料と味にこだわり、こうしたらと思つたことにチャレンジ精神で挑んでこられた方が、人間何もしないでいるのは良くないと漏らした言葉だそうです。与えられた仕事に追われ、自分自身が忙殺されるのではなく、どんな小さな仕事の中にも、新たな発見とクリエイティブな考えを持ち、祈りつつ積極的に取り組むなら、きっと神様がその時々新しい喜びをお与え下さるでしょう。心が老いていかないよう気をつけたいと思います。



《テーマ》

新しい子ども達を

招き入れて：

出会い

恵泉幼稚園

園長 大森 美保子

春の訪れと共に自信に満ちた進級児と、真綿のような心で登園してくる新入園児の元気な声が、心地よく響きます。その新学期の出会いには、何とも心が弾み、澄んだ瞳にどんどん引き込まれる日々が始まります。

「皆さん」と呼びかけても美奈さんが呼ばれていると思っているかのよう遊び続ける子どもたちや、自分の席があることにも気を留めず、一つの椅子に二人でちよこんと腰掛けているあどけなさに心が和みます。このような子どもたちとの出会いは、神さまが備えてくださっている一人ひとりの成長を、ゆつくりと楽しみに待つことの大切さを思い起させてくれます。

心豊かに育つことを願う幼稚園は、子どもたちは、真剣によいものを見つめ、感性を育てていることを

大事にしなければなりません。そこに必要なことは「私は大切なひとり」「自分らしくくていい」と感じてくれるように、愛情を振り注ぐことだと思います。

自分を大事にする心は、人を思いやる気持ちや、人を信頼する気持ちが芽生える幼児期には、欠くことができない心ではないでしょうか。

自分を大事にすることは、相手の身になって考えたり、支え合って生きていく将来に繋がることを信じ、子どもたちが出会う様々な人に、親しみを持つことができますようにと祈ります。

子どもたちを取り巻く環境は、スピーディーで、便利な物で溢れています。子どもたちのゆつたりとした息使いにふさわしいのでしょうか。簡単に手に入る豊かさから離れ、子どもたちと一緒に感謝の祈りができる平穏な毎日こそが、幸せなことであると、かみしめています。

新入園の子ども達を迎えて

元住吉こばと幼稚園

園長 三宅 悦子

今年は、五月に梅雨入りしましたが、暫くは雨が降らないで、気圧や気候の影響を受け、今一つ調子が出ないまま今に至るといふ新入園児も多いのではないのでしょうか。

私達の園では、五月の連休が終わるまで、午前保育としています。そして午後には、担任が家庭訪問をします。保護者の心配を受け止め、子どもの様子をお伝えする良い機会となっています。園児にとつては自宅に担任を迎える嬉しい時です。

新入園児を迎える四月は、毎年やって来ますが、迎える子どもや保護者は毎年違うので、緊張しながらのスタートとなります。時には予測がつかない園児の様子に、びっくりさせられたり、苦笑したり、頭を抱えることもあります。比較的小さな集団で、複数担任のクラス編成を取っている私達の園は、どちらかというとゆつくりで、個性的な子ども達に恵まれます。生活面、社会性そして、基本的な経験の面で、とてもゆつくりな子ども達を目の前にし

て、毎日工夫や苦闘を続けている担任達。集中する事が難しい。座っている事が難しい。そのような新入園児の状況の中で、ふと一年間を過ごした園児達に目を向けると、日々葛藤している私達の背後には、成長させて下さる神様が、しっかりと子ども達を抱きかかえて下さっている事を覚えさせられます。

一日一日、大切な子ども達の「いのち」をそのままお預りして、そのままお返しできることを大切にしながら、朝に、帰りに、門の前に立たせて頂いています。

扉

学校法人野末学園 中山幼稚園

園長 野末 晃 秀

何かが新しく始まる瞬間、すべての者は「扉」を開け、そこから一歩中に足を踏み入れることが必要になる。ある者は期待に胸を膨らませ、ある者はやや不安げに、それぞれの気持ちは異なるが、誰もが同じように勇気を持って扉を開き、未来へ進む時間の流れに身をゆだねる。

子どもたちにとつての「扉」は幼稚園である。新入園児にとつては新しい玄関の扉を開き、二年目、三



年目の、少し「お兄さん、お姉さん」

になった園児は新しい部屋へ入るための扉を一生懸命に開ける。中に広がるものは、まだ見ぬ友人であり保育者であり、無限の可能性を持った、まつすぐにのびる道、である。

だからこそ、我々保育者は、子どもたちが自分で自信を持って、心安らかに、そして心地よく開けることのできる扉を設定しなくてはいけない。たとえば保育者の顔や名前などは忘れられたとしても、毎年子どもたちが開くことのできる扉を、新しく作り、そつとそこに建てる。

今年、中山幼稚園は六十五周年となるが、何も特別な行事も行わなければ、祝うこともしない。それは今までと同じ、である。なぜならば毎年、一年一年がそこに集う者にとつて大切でかけがえのない時間だからであり、今年だけが特別なわけではない。性別も年齢も国籍も宗教も価値感覚も、そのすべてが違う者同士が、四月のスタートラインに立った時に、誰もが等しく、同じように心地よく、安全に、安心して、貴重な出発ができるように、そう毎年心中で新しい一年の「特別な扉」をそこに作るのである。

あなたが好き

百合丘めぐみ幼稚園

大谷 真理子

新しい子ども達を迎えて三か月。

新入園の子ども達もすでに園内を縦横無尽に走り回るようになっていきます。それは「ここは私の幼稚園」「ここは私の居場所」とひとりひとりが感じ始めたからでしょう。

私達保育者は入園から今日まで、子ども達にただ一つだけのことを伝えようと願い共に過ごします。それは「私はあなたのことが好き」「どんなときにもあなたの味方」そのことを肌で感じ、心に刻んでもらえるようにと願います。そのことが伝わり始めた夏の日々は、保育者としての踊るような嬉しさと同時に、ホツとした気持ちにもなります。

神様によって、めぐみ幼稚園に新しく招き入れられる子ども達は一人一人ユニークな子ども達です。中には母国語の異なる子ども、敏感な子ども、ゆつくり考える子ども：と個別のニーズの幅が広い子ども達もいますが、どんな子ども達にも「あなたが好き」というメッセージを届けることができるように心を傾けるこ

とを大切にしています。「こういう子には〇〇な保育」「〇〇方式でやるとこのタイプの子は…」というのはなく、一人一人のニーズを読み取る保育者の目と寄り添う力を十分に発揮することが、共に生きるための基本だと考えています。その上でみんなが暮らしやすいスケジュール、行事の在り方、保育者の配置が決まっていくのです。ですから、めぐみ幼稚園の日々は毎年微妙に違います。それはその年に与えられた子ども達と共に過ごす中で、その一年のめぐみ幼稚園が形造られていくからだと思っています。

今年度も、主が「あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの：」と語っておられることを心に留め、新たなめぐみ幼稚園を形造るべく一人一人と向き合う毎日を重ねていきたいと思っています。

新人研修

新人研修で受けた学び

平和学園幼稚園

野澤 実香

私はミッションスクールの大学を卒業し、この春からキリスト教保育を行っている幼稚園に就職しました。

森田先生のお話のなかに、イエスさまが両手を広げて子どもたちを迎えておられるということがありました。子どもたちを拒むのではなく、むしろイエスさまのもとへ向かうことを阻んだ弟子たちが叱られました。私たちもイエスさまが愛されたように、保育の現場でその愛を実践することを教えられました。その具体的なこととして子どもたちの名前を大切にするということを学びました。名前を呼んでもらうことは、覚えてもらっていると感じ嬉しくなります。また子どもであっても〇〇ちゃん・くんなどと敬称をつけて呼ぶことで、同じ人として尊重することになると気付かされました。また歓迎の挨拶の中では、自分が



〈役員会報告〉

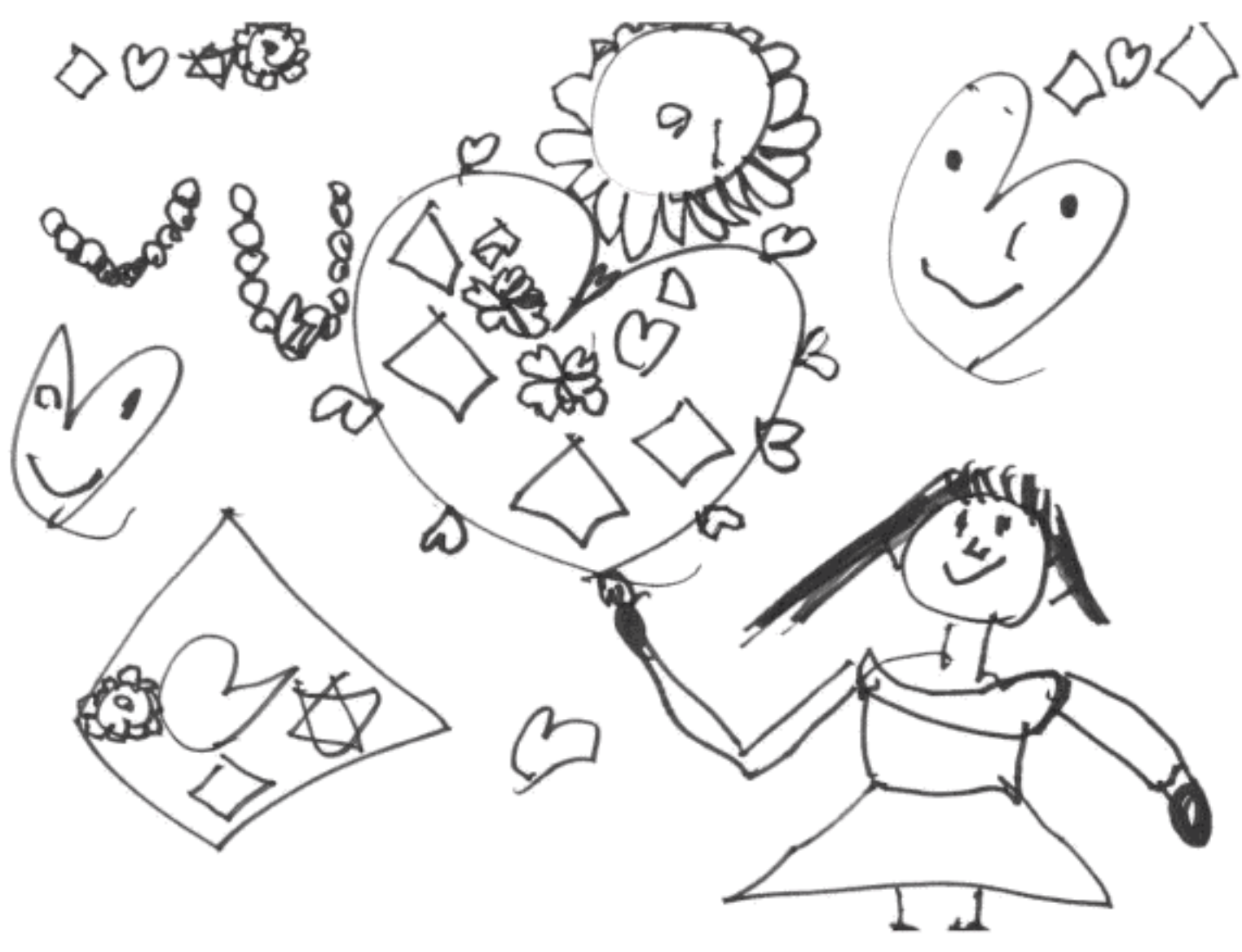
書記 奈良昌人

感じたこと、先輩の保育者からの言葉などなんでもメモに取っておくことが大切であることを知りました。

そうして書き留めておくことで、後になって振り返るときにも役立ち、また活かせていくことができます。新任でわからないことは数多くありますが、ベテランの先生や先輩をよく観察し、自分でも考えを深めていき、学ぶべきところや助言を書き留めておきたいと感じました。

歓迎していただいた中で、自身が新任だった頃の話を通してこれから働くうえで助けとなるアドバイスを聞くことが出来たり、同じキリスト教保育の幼稚園を知ることができたりと良い機会となりました。

ここで語られたことを、幼稚園に持ちかえり深めていきつつ保育の働きを担っていききたいと思います。



役員会は四月四日(木)、四月十六日(水)総会后、五月二十三日(木)、六月二十四日(月)に開催されました。

主なことを報告いたします。

◆四月十六日(火)に開催された二〇一三年度総会議事録を承認しました。

【役員の紹介】：部会長・島田勝彦先生(清水ヶ丘教会附属白百合幼児学園)、副部会長(園長会兼務)・森田裕明先生(横浜本牧教会附属早苗幼稚園)、副部会長・清水 臣先生(戸塚ルーテル教会附属幼稚園)、会計・島田美緒先生(浅野記念御濠端幼稚園)、会計・加部公子先生(鶴沼めぐみルーテル幼稚園)、書記・鈴木裕美先生(高座みどり幼稚園)、書記・奈良昌人先生(野毛山幼稚園)、園長会・豊島ときわ先生(ひかりの子幼稚園) めぐみの子幼稚園、主任会・半澤納帆先生(田園江田幼稚園)、主任会・岡田直美先生(横浜英和幼稚園)、監事・小高千恵先生(関東学院のびのびのば園)、監事・田名網仁先生(希望が丘教会附属めぐみ幼稚園)

◆新任歓迎会

四月二十四日(水)清水ヶ丘教会にて行われました。礼拝では森田裕明先生より説教をいただき、礼拝の後、半澤納帆先生から新任の皆さんへメッセージがありました。

◆第一回講演会

六月五日(水)に野毛山キリストの教会にて、蒔田教会牧師 日本聖書神学校教授 古谷正仁先生より「今こそ、私たちがなすべきことを考えましょう」のテーマでお話を伺いました。

◆新任教師研修会

七月三日(水)、十一月十三日(水)、一月二十二日(水)に横浜英和幼稚園にて開催致しました。

◆夏期講習会

八月二十日(火)関東学院大学にて開催されます。基調講演・佐伯 胖先生(前 青山学院大学社会情報学部教授 現 信濃教育会教育研究所所長)



編集後記

新制度を前に、改めて問われている「保育の質」。各先生方の文面からは、丁寧な関わりとクオリティの高さが伝わってきました。お忙しい中、原稿をお寄せくださいました各園の先生方、ありがとうございました。



発行日 二〇一三年八月二十日

印刷所 樋口タイプ印刷

編集者 神奈川部会 広報担当

聖鳩幼稚園 林 光

のぞみ幼稚園 藤田 希恵子

イラスト提供 捜真幼稚園